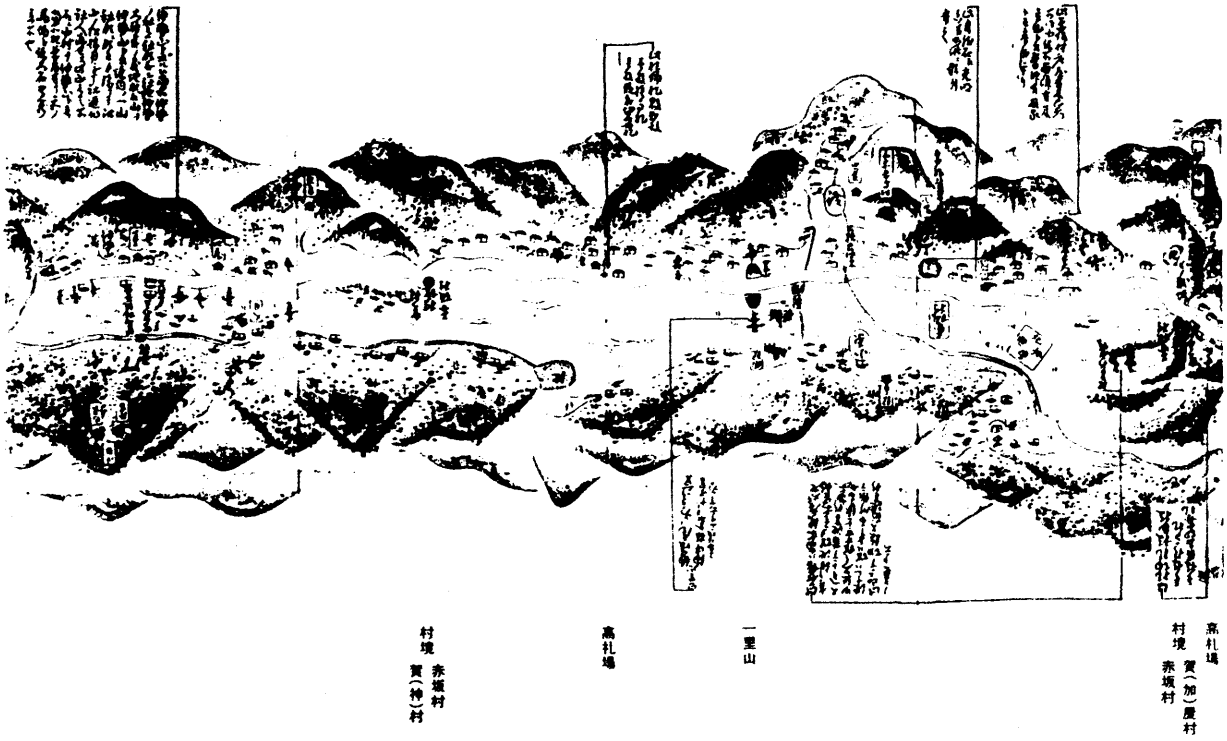
赤坂町の史跡巡り



備陽史探訪の会

講師 出内博都　細美徹爾

平成５年１２月５日

（角川　日本地名大辞典より）

あかさか　赤坂〈福山市〉

芦田川支流河手川の流域。地内鈴谷には灌漑用溜池の鈴池がある。地名の由来については，赤坂は赤迫の意で，当地の土坂が赤土であることによるという。また備前赤坂郡あるいは河内赤坂郡からの移住者が開発した地であることによるともいう。

〔古代〕赤坂郷　奈良期～平安期に見える郷名。「和名抄」備後国沼隈郡四郷の１つ。すでに平城宮出土木簡に「備後国沼隈郡赤坂郷中男黒葛十斤」と見える。現福山市赤坂町赤坂が遺称地であるが，郷域については，「地理志料」が赤坂・加屋・山北・地頭分に，「地名辞書」が赤坂・神村・柳津に比定している。赤坂地内北部の長者原には承平・天慶年間に新庄太郎実秀が蟠踞していたという。新庄氏の娘明子は16歳で村上天皇の妃となり，天暦６年空也上人に命じて郷里に近い柳津に観音堂を建立したと伝える。長者原には伝新庄氏一族屋敷跡があり，長者原大明神が祀られている。鎌倉期には現赤坂一帯は津宇本郷と呼ばれ，「水呑町史」は中世には津本郷と考えられるとする。

〔中世〕赤坂　室町期から見える地名。沼隈郡のうち。文明３年６月の西国寺不断経修業勧進井上銭帳に「西国寺上銭之事」として「五百文　赤坂西福寺栄秀」「三百文　赤坂泉蔵坊　快善」と見える（西国寺文書）。天正15年正月２日，豊臣秀吉の九州出兵に際し，毛利輝元は赤坂の豊臣秀吉宿所誘えにつき法度を定め（閥閲録20），３日には側近二宮就辰に赤坂御宿についての指令を送っている（譜録）。同年３月12日に秀吉は九州に下向する際，赤坂に立ち寄り室町幕府15代将軍足利義昭と対面している（九州御動座記）。この時随行していた秀吉の右筆世尊寺流の書家大藪正虎（楠長譜）は当地で「春の色いたらぬ方もなしとてやかたつゐ中も花の咲くらん」と詠じている（楠長譜下向記）。なお地内には村上秀成の居城跡という川上城跡がある。

〔近世〕赤坂村　江戸期～明治22年の村名。沼隈郡のうち。はじめ福山藩領，元禄11年幕府領，同13年から再び福山藩領。村高は，元和５年「知行帳」1,094石余，同６年水野氏地詰807石余，元禄12年備前検地942石余・反別82町９反余，「天保郷帳」「旧高旧領」ともに945石余。元和６年～元禄11年に小原村を合併。宝永８年の戸数155・人数1,054。万治～寛政年間頃までは大池があったとされているが，池ではなく海枝（入江）のこととみられ，新開に伴う堤を池の堤と間違って判断したものと考えられる。村の規模は東西48町・南北１里，文化年間の戸数256・人数1,183，牛166・馬55。長者原大池は天和２年の完成で，のち下見儀左衛門が浦崎より当地へ移り，当時は人家が多かった。ほかに小池28。鍋峠は品治郡諸村に通じる。また椿石は長さ８間・横４間・高さ２間で，烏帽子岩・大石・四つ石・腰掛石・スベリ石などもあった。中江八幡宮は産土神で，荒廃した社を杉原盛重が再興し，早戸・加屋・津之郷・赤坂４か村の氏神とした。ほかに古宮大明神など32。寺院は，浄土真宗浄泉坊がある。長者原には往時銅山があったと伝えられるほか巨旦長者馬場があり，長さ36間・横３間。赤坂・山北一帯の低湿地が耕地に転換されたのは，人力による耕地化の努力もあるが，隆起作用によるとみられる。万治元年品治郡側より百姓が長者原へ移り農耕に従事し，そのためこの一帯は向永谷分として扱われた。ただし租米の件で加屋村に預けられたという（備後郡村誌・備陽六郡志・福山志料）。明治４年福山県，以後深津県・小田県・岡山県を経て，同９年広島県に所属。明治７年浄泉坊へ時習館と称する学校が設けられ，翌８年赤坂小学校と改称。農業のほか養蚕・藺草栽培が中心。同21年の戸数272・人口1,394。同22年赤坂村の大字となる。

〔近代〕赤坂村　明治22年～昭和31年の沼隈郡の自治体名。赤坂村・早戸村が合併して成立。旧村名を継承した２大字を編成。明治24年の戸数443・人口2,329。同25年山陽鉄道（現国鉄山陽本線）福山～尾道間の工事完了。大正５年水越停車場開設，同７年備後赤坂駅と改称された。その後鉄道の北側山腹から花崗岩の切出しが盛んとなり各地へ搬出した。耕地は肥沃で農業は振興する。同９年の水田154町余・畑42町余・宅地18町余・山林301町余，世帯数484・人口3,028。のち尾道・福山へ出稼をする者が多くなり，農村が変容した。しかし第２次大戦後は再び農業が活発となった。昭和25年の世帯数606・人口3,313。同31年福山市の一部となり，村制時の２大字は赤坂町を冠称して同市の大字に継承。

〔近代〕赤坂　明治22年～現在の大字名。昭和31年からは赤坂町を冠称。はじめ赤坂村，昭和31年からは福山市の大字。明治24年の戸数275・人口1,386。昭和49年市立福山高校（大正２年私立福山家政女学校として発足）が現在地に移転。世帯数・人口は，昭和40年671・3,136，同57年1,116・4,135。

はやと　早戸〈福山市〉

沼隈半島の北部，芦田川支流安田川の流域。地名は隼人が置かれた土地に由来するという。大内氏家臣安井氏の居城跡という安井（赤芝）城跡がある。

〔近世〕早戸村　江戸期～明治22年の村名。備後国沼隈郡のうち。福島氏支配下では隼人村と書いたという（備陽六郡志）。はじめ福山藩領，元禄11年幕府領，同12年から再び福山藩領。村高は，元和５年「知行帳」161石余，元禄12年備前検地516石余・反別50町７反余，「天保郷帳」「旧高旧領」ともに523石余。村の規模は東西９町・南北18町。宝永８年の戸数72・人数606，文化年間の戸数140・人数719，牛109・馬27。中池のほか小池36。楠峠は葵江に通じる。香煎峠は赤坂に通じる。産土神の艮大明神のほか小祠13。西明寺は浄土真宗（備後郡村誌・備陽六郡志・福山志料）。天狗松（県天然記念物）は，地上３mのところで天狗巣病にかかり，その部分から枝が叢生し，樹形の奇異なところからほぼろ松とも呼ばれている。農業に従事する者が多く，養蚕業も盛ん。山陽道に沿うため日雇仕事も多かったとみられる。明治４年福山県，以後深津県・小田県・岡山県を経て，同９年広島県に所属。明治６年当村の児童は一部は山北小学校へ，残りは赤坂小学校へ通学。同21年の戸数162・人口902。同22年赤坂村の大字となる。

〔近代〕早戸　明治22年～現在の大字名。昭和31年からは赤坂町を冠称。はじめ赤坂村，昭和31年からは福山市の大字。明治24年の戸数168・人口943。農業が主であったが，第２次大戦後国道が拡幅されると交通条件が急変し，工業化が促進されている。

赤坂の古地名（検地帳などにあり，現在地不明のところもあり）
（庄園．名田関係）正田．大夫崎．太田．金丸．重信　五反ヲ坪
（垣内—カイト—関係）鍛冶屋．友田ガ市．畠があち．山ノ手がいち．くらがあち
平さいがいち．下があち
（山城関係）土居．小土居．道上（どうじょう—道城か）

三八金　九州御動座記

大坂より
（天正十五年）三月朔日、九州表へ御動座道之次第
三月晦日　一津國兵庫迄　十里舟付
二日　一播磨明石迄　五里舟付
三日　一同國姫地（路）迄　九里舟付へ一里
四日　一同國あかふ郡迄　七里
五日　一備前片上迄　六里舟付
一同國岡山迄　八里舟入
　但此所に中四日御休息也、
十一日　一備中なか山迄　八里
（十二日着）一備後赤坂迄　八里
　但此所へ公方様（足利義昭）御出にて、御太刀折帋にて御禮を被仰候、
　御酒上に互に銘作の御腰物被爲参候、則公方様御座所
　も赤坂之近所也、備後のともの浦へ三里在之、
（十三日着）一同國三原迄　六里舟付
　但中一日御休息、
十五日　一安芸四日市迄　八里
十六日　一同國かい田迄　六里舟付
（十七日着）一同國廿日市迄　六里舟付
　但中一日有御逗留、いつく嶋（厳）へ被成御参詣、種々御歴、
　御歌なと被遊、當社大破の躰被成御覧候て、八木五
　千石當座に御寄進、
十九日　一周防永興寺（ヤウニン）迄　七里
廿日　一同國呼坂迄　六里
廿一日　一同國富田市迄　七里舟付
廿二日　一同國荷中迄　九里
廿三日　一長門山中迄　八里
廿四日　一同國はぶ迄　七里舟付
廿五日　一同國赤間關迄　六里舟付
　但中二日御逗留、此所を關戸とも云、是より渡海に而筑紫
　地へ被爲渡候也、
　以上百卅七里、是は卅六町之道積、但備後赤坂より周防永
　興寺までは四拾八町道也、
（中略）
二日（四月）一筑前尾熊　四里

赤坂（1）の地質年代

（2）中生代

a 第三紀 ★★新生代

b 第四紀 ★★黒雲母花崗岩

（200万年）

（イ）洪積世（氷河時代）

（ロ）沖積世（約24万5000年前）

（6500万年〜100万年前）浅海底に（地層堆積）礫岩・砂岩・泥岩

赤坂戸瀬の内地殻変動（地溝帯陥没）

（神村・赤坂・津之郷）断層（北東〜南西・北東〜南々西）

（北東〜南西・上昇断層）

（海面上昇・沖積層（礫・砂・粘土））

◎①地溝一帯は河手川の沖積地となる

鳥羽（小字）下鹿田手川の沖積地となる

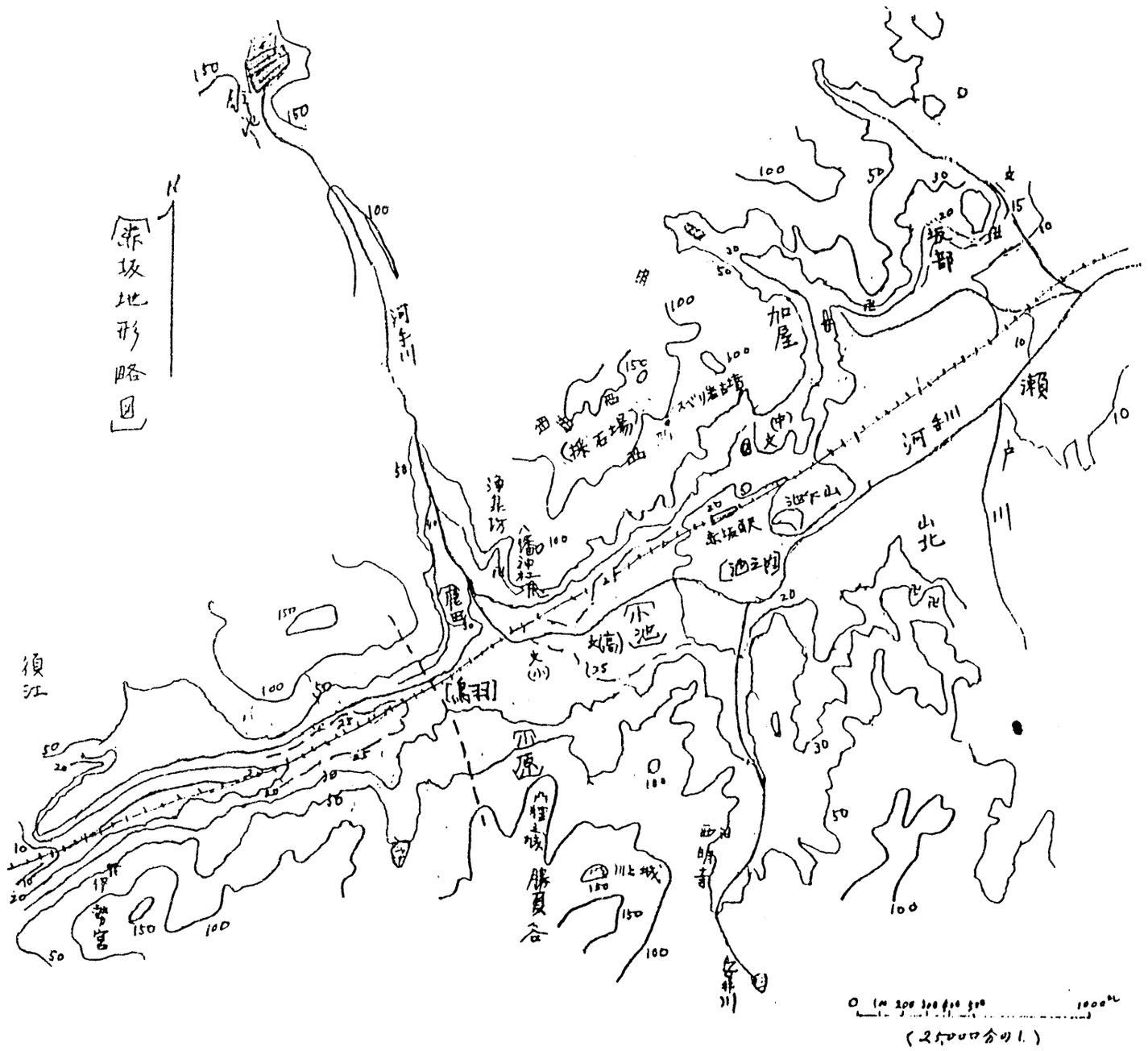
（小字）池山内至鳥羽・小間の小原

（六郡志）池の大池・大池につい

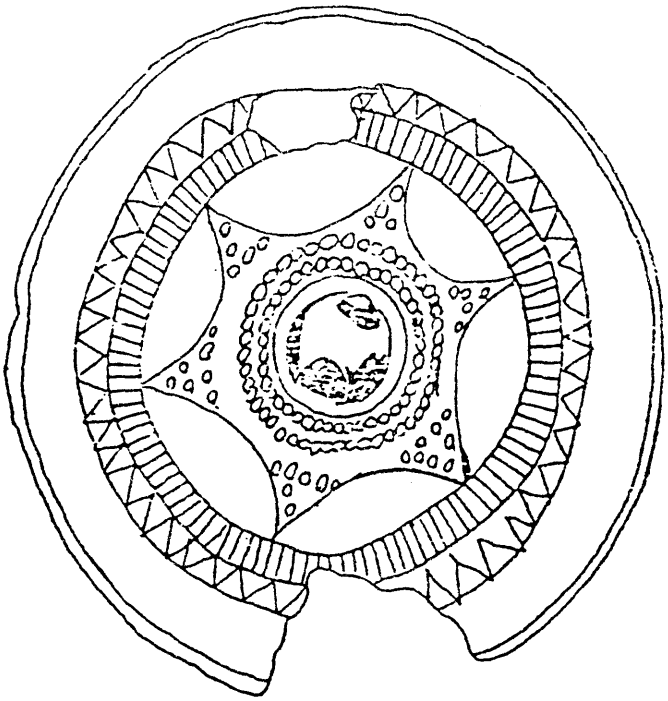
（中国行程記）万治・寛文・天和の頃大夫崎

（中国行程記）沖の大池まで大池と記す・

（二広文キ大池有り・・・



一　内行花文鏡



大正時代（一九一二～一九二五）後半のころ、早戸太田の丘陵（農免道路西側）を蘭草の共同干場用に地ならし作業中、中央の円形部分をけずり取っていたとき、太田古墳（五世紀前半頃築造）は発見された。

ここからは、朱に染った人体の頭部、勾玉一、管玉七、細い管玉十四、棗玉二及び、直径九・五センチメートルの青銅製の仿製内行花文鏡が出土した。

内行花文鏡とは、その一部に内側に向けた円弧で円を等分した図形がある鏡で、花文とはこの円弧を花弁にみたてたものです。また、これが鏡の内側に向ってならんでいるので内行という。（仿製とは、中国製を模倣して日本で製造したという意味）

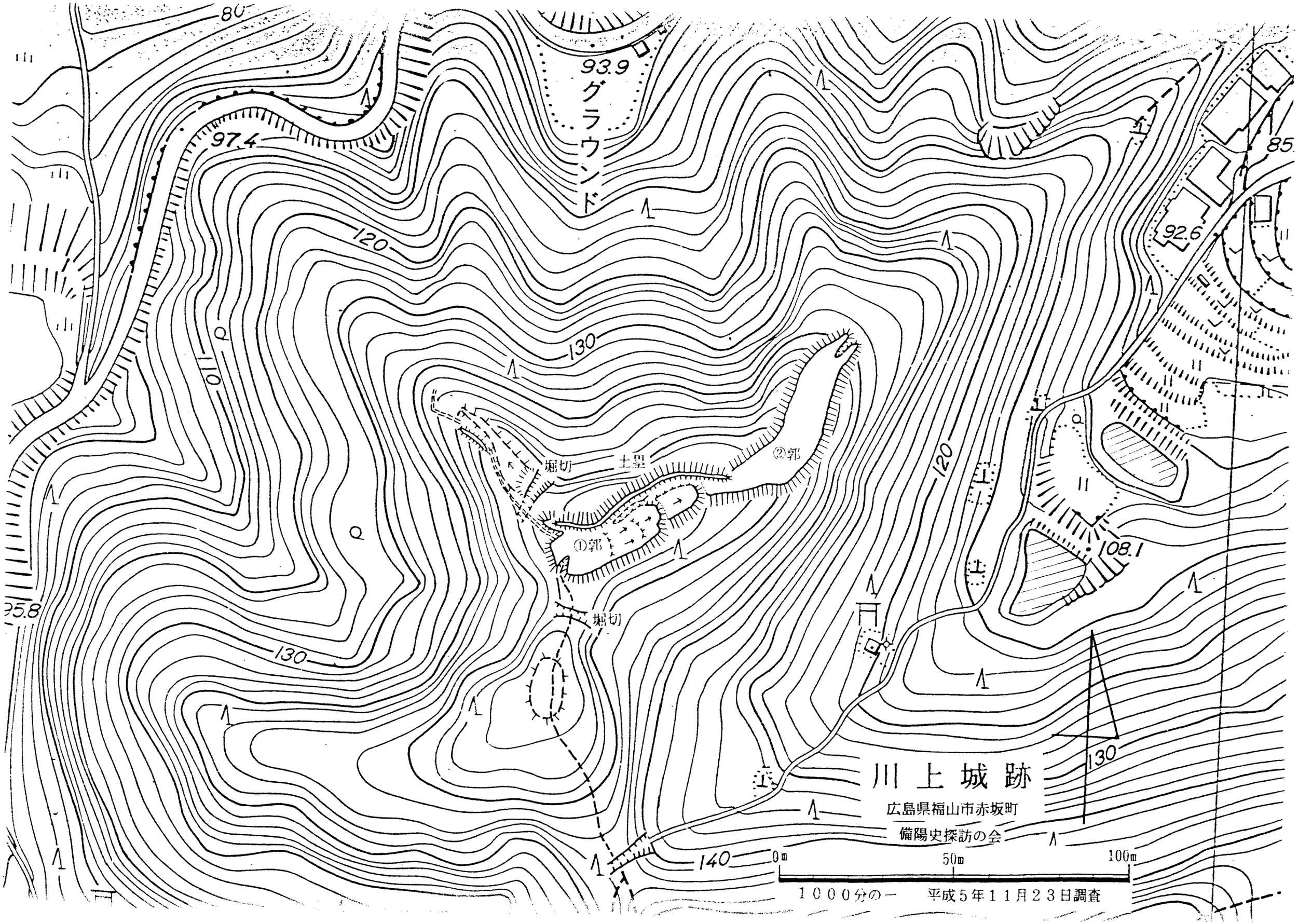
（細い管玉以外は　福山市重要文化財・藤原肇氏所蔵）

二　山城跡

（1）川上城――村上加賀守秀成在城という。近江谷に「兵田」「的場」の屋号がある北西この城の出城と伝えられる「狸の城」があったという。

（2）安井城――早戸船山，16世紀前半，出雲の尼子経久が備後に南下し，これに呼応した本郷の大場山城の古志氏らの対抗するため，急遽大内義興によって派遣された安井石見守が築城したが，数年で長州へ帰ったという。

（3）赤柴城――赤柴山（城山）山頂，16世紀半ばの厳島合戦後，大内家臣安井八郎兵衛尉久吉が，毛利氏に対抗するため築いたという。


川上城跡
広島県福山市赤坂町
備陽史探訪の会
1000分の一　平成5年11月23日調査
0m
50m
100m
グラウンド
93.9
97.4
92.6
108.1
95.8
85
80
120
130
140
110
堀切
土塁
①郭
②郭

一二　勝負銅山

赤坂鉱山とも言い、小字勝負に在り、坑口数口あり鉱床極めて広く大字早戸上組道上隣村神村地域に及び東西南北十数ヶ所の鉱床露頭あり、遠くは江木部落を経て瀬戸村別所に露頭ある。

大同年間（八〇六）凡そ千百六十年の大昔採掘初められたと伝えらる。

永く休鉱していたが其後嘉永年間（一八四八～一八五三）の頃赤坂庄屋有木（土井）により盛んに採掘せられた。

明治二十七、八年（一八九四）日清戦争当時岡山の稲垣（某）の経営の下に最も盛んに採掘せらる。

鉱石は金、銀、銅、亜鉛、砒素、水銀鉱及硫化鉄等多種類に及び含有率高く有望鉱山として盛え坑夫五十人以上昼夜交替にて採掘、坑夫世帯二十余世帯も移居し、事務所製煉所の外、宿舎長屋、飯場、合宿所等広大な設備ありて盛大であった。

従前は多ラ式製煉をなし廃残鉱石は、別子四坂島製煉所に送っていた、岡山県児島郡小串製煉所に多量送付し鉱石中含有率良く石英母体鉱なるため製煉能率よく大いに歓迎せられた。

明治三十三年（一九〇〇）北清事変当時銅の必要量増大し鉱山熱高まり岡山市小西某の経営の下に再度盛んに採掘せらる、坑夫十数人の外鉱石運搬、水揚作業等、土地の若者達多数使役なした。

此の頃火薬は黒色小粒薬を用い、紙より導火線を使用、採掘鉱石は笊籠にて背負運搬、水揚げはスーポン竹筒使用の原始的操作であった。

其後暫時休鉱し、大正六年（一九一七）横浜市の茂木惣兵衛経営し、事務所、選鉱所、合宿所、長屋等再築し鉱内にトロッコ線路をしき採掘に火薬ダイナマイト、導火線、雷管、電気水揚等近代的設備の下に再々発掘し、相当多量採鉱した。

昭和十三年経営者替りて、川田、山本、中島三者共同となり更に昭和十七年、伊藤辰次郎、中山、菊磨、川田の四者経営となり亦昭和二十八年大阪市星野清経営の下に採掘す、数次に亘る採鉱により坑の中心部近く、十文字とて畳二、三十畳敷きもある大洞窟あり、ここより四十米にも及ぶ深き鉱脈あり又坑道

より三十米以上の高き鉱脈あり東西、上下、左右に数条の坑道ありて一、二線は早戸川上に掘進し同地に新、旧二つの坑口あり。

星野清採掘数年にして休鉱となり現在に至る。

（坑内地図関係者、桑田熊太郎所蔵）

四

赤坂八幡神社

創始は沼隈郡内の葉江・山手・瀬戸八幡と同じく9世紀半ば貞観前後ではないかと思われる。建久2年（1191）に再建されたという（別当寺であった瀬戸町の真言宗福成寺の記録による）現在、周辺に「馬場」「宮の前」の小字があり、立派な宝篋印塔あるが、戦国末には廃れたため天正8年（1580）神辺城主杉原盛重が再建し社領18貫（米約20石ぐらいか）を付与した。これは良海上人の再興願いにより平朝臣杉原盛重施主となって再建し（施行担当者藤原重家・大工藤原重則）遷宮の儀式は明王院宥崇上人により行われたと棟札が伝えている（現在棟札不明）当時、赤坂八幡は赤坂・早戸・加屋・津之郷などの氏神であったという。

なお、鉄先（クワサキ）八幡、中江（ナカゴウ）八幡とも呼ばれている。

五

宝篋印塔　（3基あり）

（1）赤坂八幡神社の東上方にあり花崗岩製。高さ二・三五米、基底の一辺一・五米隅飾が少し外に開いている。南北朝様式　（福山市重文）

（2）イコーカ山古墳にあり、相輪部分が紛失している。南北朝様式

（3）早戸の長神社の裏にあり。高さ一・四五米。鎌倉期のものか。

（4）有木家の鏡岩（八幡神社西の民家の一枚岩）

一八　赤坂の石の曼荼羅さん

「曼荼羅（まんだら）さん」本村一番組大井、伊藤十郎宅の背後に曼荼羅さん在り。

高さ二・二七米（七尺五寸）横四米（一三尺）の大岩面に直径一・三米（四尺二寸）の円形を彫り、中央には梵字によって密教の金剛界曼荼羅五仏を種子（しゅうじ）でおき繞らす、光明真言をもってし、更にそれと並べて縦一・六六米（五尺五寸）横五一糎（一尺七寸）に画し中に次のように刻している。

開眼廻向洛東泉涌寺住職律師龍孤比丘勤行之

三界万有無両縁一切含識乃至法界平等利益

敬白

干時貞享乙丑天三月吉辰日

福山常法義龍阿闍梨造之

附　記　貞享乙丑天年は貞享二年（一、六八五）である。

備陽六郡志、外篇赤坂村の部に、「街道（九州街道）の山際田の中に、光明真言を彫付たる大石あり、福山浜の町木屋孫右衛門と云者施主にて供養しけるとなり」としているのが、それと見られるが更に同書は見取図を附しその円内には「光明真言字輪」と記入している。

然し当地では「お大師さん」と呼んでいる。

備陽六郡志に上記の「光明真言字輪」と記しているが、かような類のものを「マンダラさん」と多く言われている。

「貞享乙丑天」貞享二年（一六八五）であり、水野四代勝種が福山藩主の時代であり、藩祖勝成公は福山草創と共に多数の寺社を興したが尚此の時、移転整備が続けられていた頃、藩は名僧を招じて法筵をしかし

赤坂の石のまんだらさん

めるなど仏教に対し厚い信尊を傾けていた折柄であった。

作者は「福山常法義龍阿闍梨造之」とある。

阿闍梨とは高僧の義であるから僧侶によって造られたものを経済的部面を福山浜の町豪商木屋孫右衛門が受持ち施主となったようである。

曼荼羅とは、仏や、菩薩や諸天などを一定の法則に従うて配列したものを斯くは称するが、元来輪円の義であり、印度では秘法を行なうに当たり諸神の来降を求める時「魔もの」の侵入を防ぐため砂上に円形を画する事とした、之が曼荼羅の起源とする。密教には、その曼荼羅に四種があり大曼荼羅、三味那曼荼羅、茶磨曼荼羅、法曼荼羅がそれで其の内法曼荼羅は種子曼荼羅とも称し諸尊を種子（梵字）で表示するものであり赤坂に於けるもの、又之に類推するものの如くである。

七　石切場

本村の中央を東西に走る国道以北の峨々たる山脈は塁々たる岩山である、その花崗岩は無尽蔵と云われる石材資源を埋蔵している。

之が発掘は古く明治以前より行なわれて居たようであるが石割技能も幼稚であり輸送関係も悪く地区外への販売は殆んど無かったようであるが、明治十年頃より火薬等用い本格的発掘しらるるようなった、而して大正五年赤坂駅の開設を契機に急に生産の増大を来し、他府県への販路も開け本村石材は畳表と相並んで二大特産物となった。

明治時代の生産数量把握出来難いが大正、昭和初期の本村統計に表われる、花崗岩建築用並石材製品産額は次の通りである。

年次	花崗岩建築用 生産数量	価額	一才当単価	石材製品 数量	価額	附記
	才	円	銭		円	
大正九年	二五〇、〇〇〇	一五〇、〇〇〇	六〇	一	一〇〇、〇〇〇	甚其他加工製品なれば数量不明
〃一一	五二、〇〇〇	三六、四〇〇	六〇	一	二四、七五〇	
〃一二	五五、三〇〇	四一、四七五	七五	一	六、三〇〇	
〃一三	三三、七〇〇	二四、五二五	七五	一	四、八〇〇	
〃一四	三五、八〇〇	二五、六〇〇	七〇	一	五、〇〇〇	
〃一五	三三、九〇〇	二三、九六〇	七〇	一	五、二〇〇	
昭和二	三〇四、五〇〇	二三、四四五	六五	一	四、五〇〇	

年次	花崗岩建築用 生産数量	価額	一才当単価	石材製品 数量	価額	附記
	才	円	銭		円	
〃三	四一、三九〇	三三、七四〇	五五	一	一	
〃五	三五、二八〇	二七、六四〇	五〇	一	二、七五〇	
〃七	二〇、〇〇〇	五、〇〇〇	二五	一	一	財界不況
〃八	二七、〇〇〇	六、三七五	二三	一	一	〃
〃一〇	三二、一〇〇	一四、四二〇	四五	一	一	
〃一七	三三、三〇〇	一四、五〇〇	二〇	一	一	

八　古墳

そして、県道御幸・松本線に出て市立済美中学校前を過ぎる。さらに五〇〇メートルほど歩くと県道北側に市指定史跡『スベリ石一号古墳』の標柱が立てられているのに気づく。

標柱のところからさらに山に向かって上って行く。一五〇メートルほど先の三叉路を右に取りさらに上ると採石場にたどり着くので、その上り道から谷を北へさらに入り、東側の尾根の頂上を目指す。

こうして、瀬戸川流域を見下ろす尾根の頂上部分に、『スベリ石一号古墳』は築かれている。直径約一三メートルの円墳で、南側に開く横穴式石室がある。この横穴式石室は玄室部分と羨道部分とがはっきりと区別されていて、羨道部分が石室の東側の壁に沿って作られた「片袖式石室」といわれるタイプのものである。

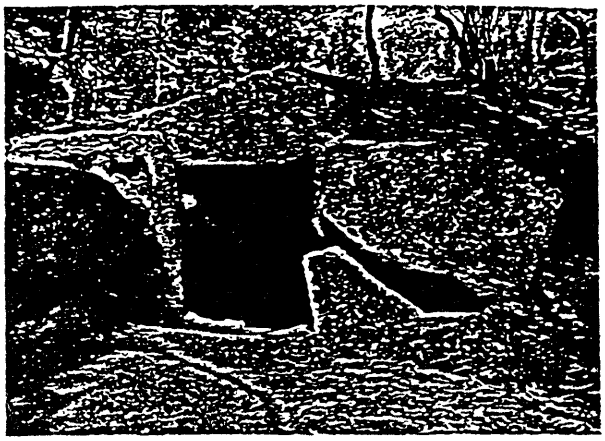
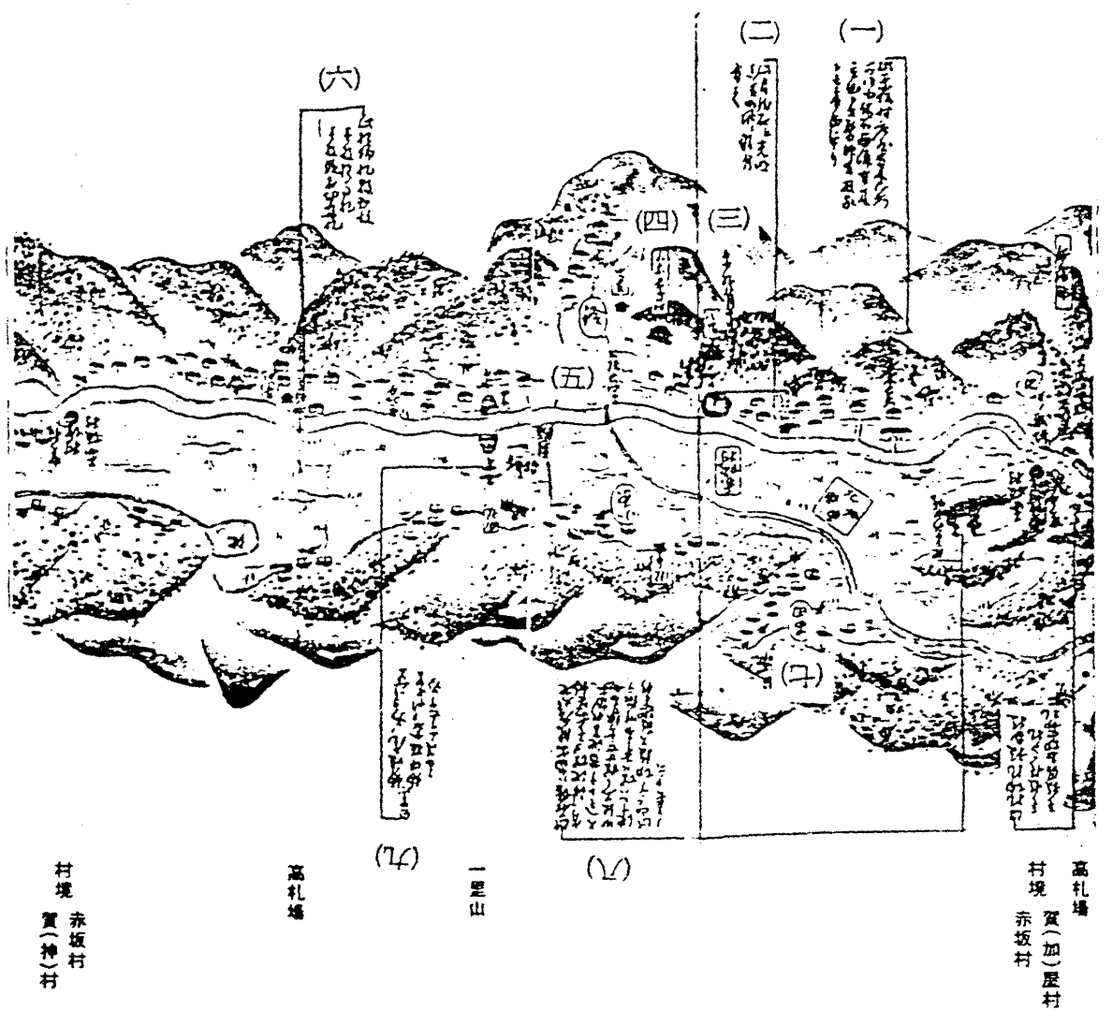


写真37　スベリ石古墳

石室の全長は九・五メートル、幅二・〇メートル、高さ二・五メートルで、この周辺地域では最も大きな規模の横穴式石室である。出土遺物は確認されていないけれども、古墳時代後期の六世紀前半のものと考えられ、この地域の代表的な横穴式石室の古墳と言えよう。

また、この『スベリ石一号古墳』のある尾根の南西の神原病院裏の尾根には、小型の箱式石棺もいくつか見つかっている。どれも墳丘はほとんど残っておらず、古墳時代後期の小規模の古墳群である。

江戸時代の赤坂の様子



(一) 此赤坂村庄屋有木長右門所御小休所西隣有木玄仙ト云医師有両家トモニ有徳仁ナリ

(二) 此自然石エ光明真言此如彫付有之

(三) 祭礼八月十四日

(四) 真宗常専坊

(五) 土橋長四間

(六) 此札場札数弐枚壱枚捨高札壱枚假名切支丹札

(七) 早田

(八) 此石塔ハ当所沖ニ広キ大池有リ此池埋メ其所開地スベキトテ昔池奉行当所出張久シク埋サセシニ深サ知ザル池ナレバ埋メル事不叶依ッテ此山ニテ切腹ス故池奉行ノ墓ト云

この図は、『中国行程記』の一部であり、『中国行程記』とは、宝暦年間（一七五一～一七六三）の末期（杉田玄白が西洋医学・平賀源内が電気学を唱えたころ）長門国（山口県）萩毛利藩寺社組郡方地理師有馬喜惣太によって作成された図で、萩より周防国（山口県）三田尻で山陽道と交わり伏見京境までの道中の様子が描かれているものである。

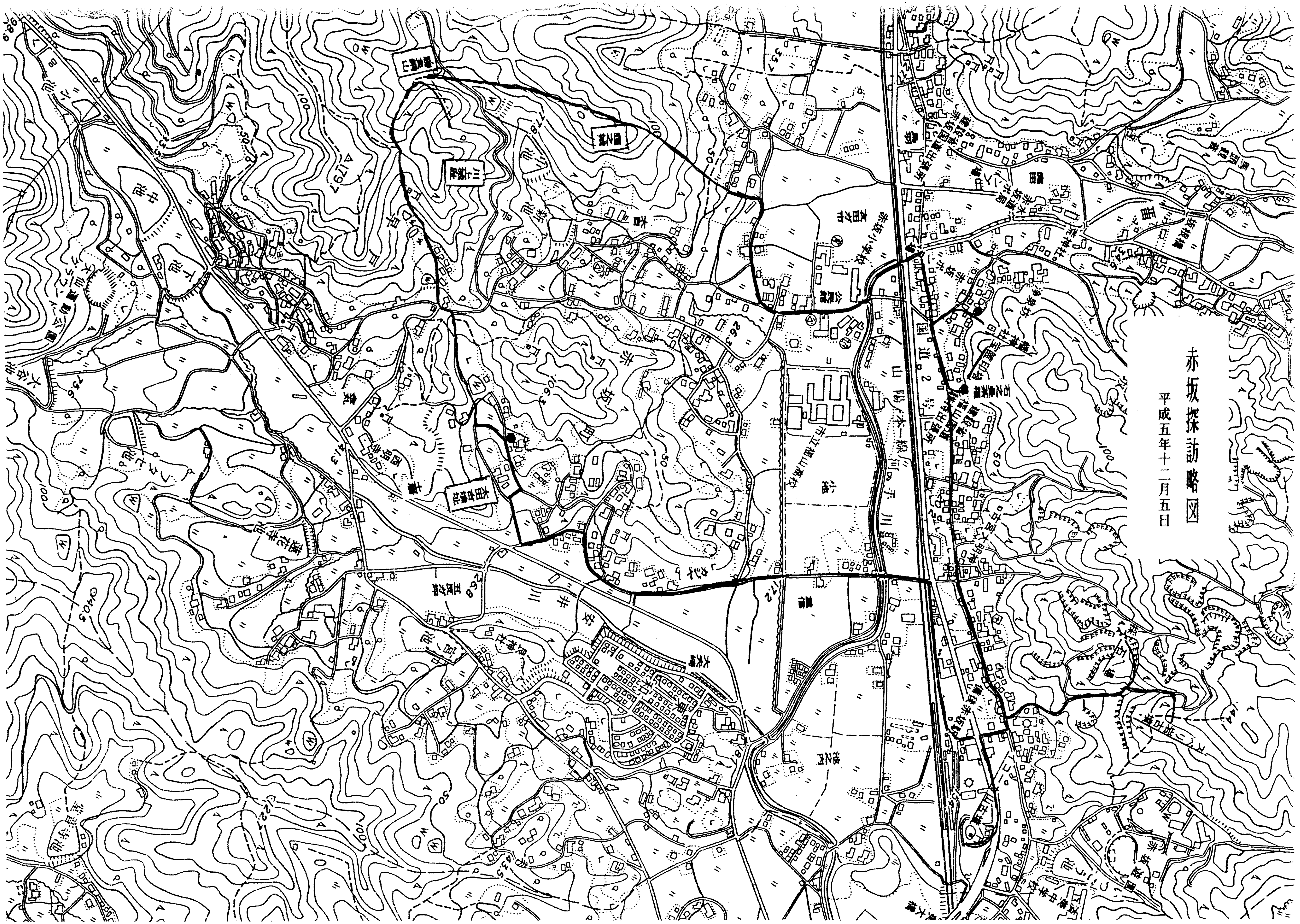
これは、藩主が萩と江戸の間を支障なく参勤（萩から江戸）下向（江戸から萩）するために、街道筋の土地事情を記録したもので、例えば、橋は板橋・石橋・土橋などの材質及び長さが記録されている。

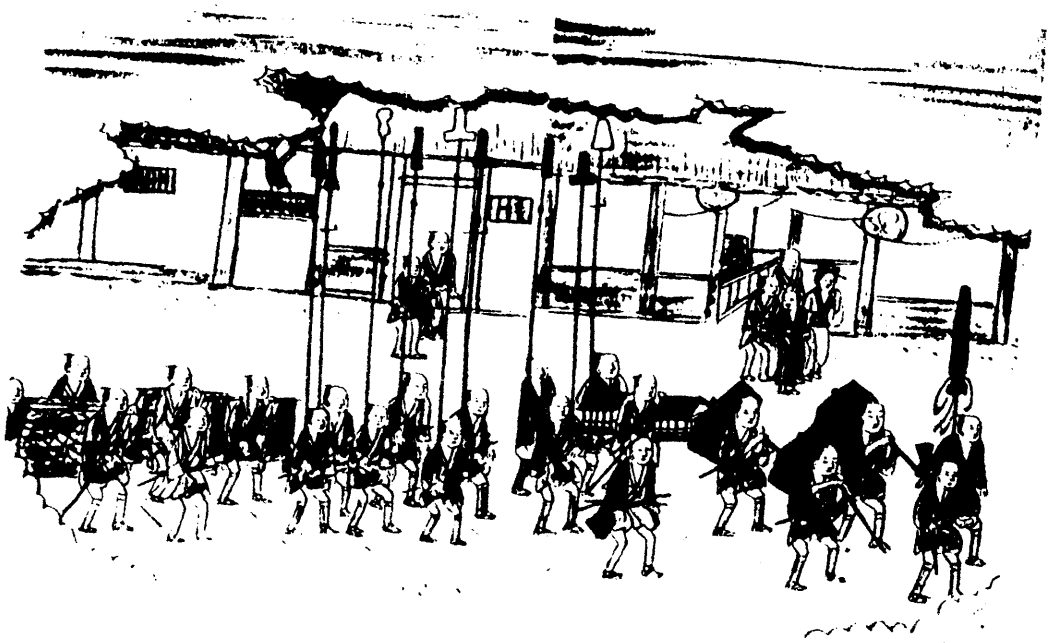
図面と文字が街道に向って書かれているのは、実物の地形と図面が、街道上から照らし合わせやすいためではないかと思われる。また、当地の人から聞いて地名等を書いたらしく、聞ちがいと思われること（例・早戸→早田）や当字（例・浄泉坊→常専坊）がみられる。

有馬喜忍太は、宝永五年（一七〇八）萩の福原家に生れた。雪舟流絵師雲谷の弟子となり、享保七年（一七二二）雲谷家への依頼により毛利藩の御用を初めて勤め、元文二年（一七三七）毛利藩絵図方に加えられた。

彼がどのような方法で測量したか不明であるが、明和三年（一七六六・田沼時代が始まろうとしていたころ）藩命により製作した防長両国の粘土模型によれば、高度の測量技術を身につけていたものと思われる。

なお、伊能忠敬が『大日本沿海輿地全図』を作成したのは、一八二一年のことである。



赤坂探訪略図

平成五年十二月五日